

# アメリカが警察官をやめ 独裁者が勢いづく 世界のカオス

在仏コラムニスト 安部 雅延



## 大国のプライド

ロシアのプーチン大統領が超えてはいけない一線を越えたことで、世界はカオスの様相を呈している。世界規模の経済制裁の打撃はロシアだけでなく、ロシアから化石燃料だけでなく、木材などの輸入がとまり、自由世界も深刻な経済的ダメージを受けている。

われわれは連日、ウクライナで起きている戦争の惨劇を見ながら、多くの人々は戦争を終わらせられない無力感を味わい、確実に精神的ダメージを被っているはずだ。これは大掛かりなハリウッド戦争映画ではなく、現実なのだ。町は完全に破壊され、道路に遺体が横たわる光景を毎日見せられている。

日本は中国だけでなく、ロシアの隣国でもあり、ウクライナの惨状は遠い国の話ではない。まったく話が通じそうにない中国、ロシア、北朝鮮を隣国とする日本は、戦後、最大の安全保障の脅威を肌で感じているはずだ。

はずだというのは、77年前の1945年に日本と同様、敗戦国とし

て連合国側によって封じ込められたドイツも、平和ボケが激しいからだ。

ドイツのシオルツ首相はウクライナへの軍事支援を躊躇し、ウクライナは他の欧州諸国から不信の目で見られている。ウクライナの西端から1000キロ離れたフランスより400キロしか離れていないドイツ人の危機感が薄いのは、ドイツ国内に220万人ものロシア人がいるからだ。

では、どうしてプーチン氏は自殺行為ともいえる戦争に踏み切ったのか。それはソ連のKGB時代から見えてきた世界が21世紀に入って激変し、特に世界の秩序維持に最大限の影響を与えていたアメリカが、その任務をやめたことにあるのだろう。

今回もアメリカは衛星などで、ロシア軍がウクライナに軍事侵攻する動きを強めていることは昨年暮れから察知していた。ところがバイデン米大統領は「ロシア軍がウクライナ国境を越えても、アメリカが軍を派遣することはない」と断言したことで、プーチン氏はゴースインを出した。

オバマ政権以降、アメリカは世界の警察官の役割から徐々に退き、他

国の紛争を傍観するようになった。オバマ政権の主義主張の異なる国家への無関心は、権威主義国家にチャンスを与えることになった。トランプ政権は中国の陰謀には気づいたが、プーチンの野望は認識できなかった。

中国の台頭で過去にはアメリカと双璧をなし、対等に戦う大国だったロシアの国内総生産(GDP)は今では韓国の後塵をなめ、10位にも入っていない。この不快な状況を受け入れられるはずもないプーチン氏の中には、大ロシア帝国の野望が燃え盛り、前後の見境もない暴挙に出ることが推測される。

北京五輪の2008年にジョージアに軍事侵攻し、2014年にはウクライナ東部に侵攻し、クリミアを強引に併合したロシアは、米欧の制裁を受け、それが経済成長を妨げていることを考えると同業自得とも言える。だが、同時にプーチン氏の西洋先進国に対する怒りは長年培われ、頂点に達していることが発言の端々に見てとれる。

30年前までは、鉄のカーテンの向こう側で泣く子も黙る大国を維持し

てきたソ連帝国は、今では核兵器保有数以外は、天然ガスなどの天然資源に頼るだけだ。南米ベネズエラのような小国に成り下がった惨めさは屈辱意外の何ものでもないはずだ。

## 共産主義の爪痕

しかし、ウクライナの人々でさえ、ロシアの軍事侵略は「21世紀とは思えない野蛮な行爲だ」と言っているわけで、誰もが目を疑っている。その理由を私なりに分析するとすれば、結論的には、共産主義が文明の進歩を止めてしまった結果だと、私は見ている。

ちょうど筆者がパリに引越した1991年の翌年、ベルリンの壁が崩壊した旧東ドイツを取材したことがある。なぜ、ドイツ、とりわけ旧

東ドイツでネオナチ運動が盛んになったのか、が主要テーマだった。当時、西ドイツが受け入れたトルコ移民が急増し、彼らの家や店がネオナチに襲撃される事件が多発していた。

分かったことは、西ドイツ国民がナチスドイツの蛮行を、戦後大反省し、贖罪意識を持って生きてきた一方、東ドイツ国民は、まったくその意識がなかったことだった。東ドイツはソ連邦に属し、共産党の支配下にあり、いわば思考停止状態だった。

真理は共産主義にあるとすることで、そのイデオロギーに支配された国民は、結論の出ている真理を改めて検証するとか、善悪を判断することは禁じられ、人々は、思考を奪われた。さらに、共産主義以外の価値観を口にすれば逮捕され、思想的な矯正が行われていた。

結果として、過去の歴史は唯物史観に基づいたものだけになり、ナチズムがどうだったのかを再考する機会は奪われた。旧ソ連も実

はヒトラー同様、共産主義体制に異論を唱える者を粛清することに心血を注ぎ、共産主義下に置かれた国の文明の進化は完全に止まり、歴史そのものをフリーズさせた。

これは中国、北朝鮮、キューバなど共産主義体制を選択した国々に共通するもので、人間が自然に学習する機会を共産主義が奪ったからだ。今、われわれが見ているウクライナの悲劇も、その最悪ともいえる共産主義ウイルスの感染後遺症から、19世紀の蛮行が繰り返されているともいえる。

プーチンの夢見る大ロシア帝国の復活も、レーニン、スターリンによって捏造された歴史が下敷きになっている。偏ったイデオロギーがいかに事実を捻じ曲げ、解釈される状況を作り出しているかが理解できる。

同時にもう一つ、プーチンを蛮行に踏み切らせた原因の一つは、アメリカが世界の秩序と安定のための中心的役割を担うことを、止めてしまったことにあると私は見ている。共産主義で凍り付いたというところは、恨みの思想に染まっていたわけだが、東西冷戦で勝って有頂天に

なったアメリカが、その後の世界秩序に貢献する意志の薄れが世界をカオスに導いているように見える。

ロシアの蛮行で、自由と民主主義を信じる陣営にも、枕を高くして眠れない状況が訪れた。それも世界多くの核弾頭を持つロシアと、核以外の軍事力でアメリカと肩を並べる中国、核武装した北朝鮮、密かに核兵器を開発するイランなどが膨張主義を続ける意思を持っている以上は、何一つ安心できる要素はない。

にも関わらず、平和ボケは治らず、現実から目を背け、特に政治家たちが安全保障をともに議論しようとしれない、日本の状況は深刻といわざるを得ない。ウクライナ政府はロシアに危機感を感じてきたが、国民には切迫感はなかった。だから、危機が迫っても国外に脱出しようとしなかったことが被害を深刻化させた。今後はビジネスの世界でも、最も重視されるのはリスクマネジメント、特にカントリーリスクへの注目が集まっている。政治と経済は別物だというのは幻想にすぎないことを、今回のウクライナ危機は思い知らせていると言えそう。

文明を終わらせる  
つもりなのか？



UP

奪われた。旧ソ連も実